

20171011_戦略経営研究会_シンギュラリティ研究会_議事録

日 時：2017年10月11日（水）19:00～21:00

場 所：東京／銀座 ルノアールマイスペース銀座マロニエ通り店

テーマ：シンギュラリティの与えるインパクトとは？

～人間の知性を科学技術の進化の速度を超える時～

発表者：中山達樹さん

（シンギュラリティ大学エグゼクティブ・プログラム修了生

／弁護士、中山国際法律事務所代表）

参加者：参加者 7人（発表者を含まない）

（会社経営、会社員、NPO 法人理事長、行政書士、司法書士など）

発 表：

AGFAの時代と言われています。AGFAは、Apple、Google、facebook、amazon の頭文字です。2016年秋に開催されたAPECに facebook のザッカーバーグが登場しました。テクノロジーが国民国家を超える存在になっているといえます。

シンギュラリティはコンピュータが人間の知能を超える事象のことです。シンギュラリティ大学はその事象に備えるために、学ぶ場を提供しています。その受講者の属性は、投資家、CEO、それ以外となっています。講義は6日で26クラスです。宇宙、ロボット、自動運転など多岐にわたります。テーマは「10億ドルで稼ぐのではなく、10億人に影響を与える」です。ムーンショット（どでかい目標を掲げる）を最重視しています。これは、組織論の中でも重要です。キーワードはエクスポネンシャル（加速度的）です。リニア的（直線的）な成長と、加速度的な成長ではスピードが違います。シンギュラリティの提唱者であるレイ＝カーンワイツは「2045年には1000ドルの人工知能（AI）が全人類の知能の総和を超える」としています。既にAIが人間の知能を超えている分野もあります。囲碁、将棋、チェスなどです。この先は、汎用AIへの開発となります。日本のスーパーコンピューター開発者である齋藤元章は「プレ・シンギュラリティ」を提唱しています。2045年を待たなくても既にシンギュラリティは起きているとするものです。

もう一つのキーワードは「6つの「D」」です。①デジタル化（アナログデータのデジタル化）、②潜航（最初は目立たない）、③破壊（既存業界を破壊）、④非物質化（スマホ上の情報・サービス）、⑤非収益化・無償化（スマホのフリー通信アプリ）、⑥大衆化（市場シェア急拡大）の事象を指します。テクノロジーが既存の市場を破壊するということです。非物質化・非収益化・大衆化は「アバンダンス」ともいいます。過去、有料だったものが、無料になっていくという事象です。限界費用ゼロ社会が到来しています。たとえば、アフリカでは通話のディープフロッグ戦略がとられています。固定電話の普及をすっ飛ばして、いきなりスマホの普及の段階に進みます。通話業界そのものが破壊されています。Uber、airbnbなどもここにカテゴライズされます。ジョン・M・オリンはこれらの事象に対して「10年後には、フォーチュン500のうち40%が消えているでしょう」としています。サリム・イスマイルは「自らを破壊しなければ、早晩だれかに破壊される」とします。破壊的な科学技術はたとえば自動運転車です。自動運転車による輸送が行われるようになれば、駐車場が要らなくなります。不動産の市場価値も変わります。既に、ドローンは国境を超えて違法薬物の輸入をしています。Holoportation（3D投射）があれば、自分は事務所にいたままで、遠隔地でのセミナーが可能になります。「石器時代は石がなくなったから終わったのではない」のです。石油時代も石油が

枯渇してから終わるのではなく太陽光の普及によります。クラウドソーシング／オープンソースの威力も大きくなっています。雇用は時代遅れになりつつあります。世の中の知恵を集める仕組みに移行してきています。たとえば、宇宙船の開発などでもネット上で知恵を集めてプロジェクト化するというビジネスも立ち上がっています。シェアリング・エコノミーの普及も加速しています。イーロン・マスクは「車を所有することは、馬をするような時代遅れに」なるとしています。シェアリング・エコノミーと業法規制は衝突するようにもみえます。しかし、Rating Systemといった品質確保の代替措置があれば良いのではないのでしょうか。たとえば、中国です。市民同士の相互評価システムにより、民度が上がってきています。We arableからInsidable（身体の中へ）へも進んでいます。既に、レーシック、ペースメーカーなどは体内に入っています。端末の携帯化から身体化です。UI（ユーザーインターフェース）も変化してきています。手書きから、タイプライター、ワープロ、パソコン、タッチパネル、音声認識まで進んできています。そして、脳波認識が実現するでしょう。利便性がプライバシーを上回る時代に来ているともいえます。

エクスポネンシャル思考は、サッカーでボールを追いかけていてはダメということです。そうではなく、2、3手先を読む必要があるということです。10%Upを目指すのではなく、1000%Upを目指します。このように思考しないと時代遅れになるということです。また、視点を変えることは、聡明であることに勝ります。これは、進む前に、補助線をいかに引くかを考えることでもあります。99分間、ショートカットを考えて、1分間でゴールします。バーナード・ショーは「非合理的な人間は世間を自分に合わせようとする。すべての進歩は非合理的な人間のおかげである」としています。シンギュラリティ時代の生存戦略の核は「再定義」です。たとえば、「モノからコトへ」です。レゴブロックのレゴ社は遊びを再定義して生き残りました。医師であれば「そもそも医療とは何？」と考えることです。私は弁護士です。この仕事を「お客様にインスパイアすること」、「お客さんを元気にすること」と再定義しています。ゲームの中の1位ではなく、ゲーム・チェンジャーになることを目指すべきです。発想の転換を行うためには、枠を外して考えるべきです。そして、Active Non-Actionではいけません。忙しい忙しいというけれど、ほんとうに重要なことをやっていないのでは意味がありません。

シンギュラリティ時代の選択肢を違法かどうかという設問に当てはめてみます、やめる、待つ、意見を聴くなどの選択肢が既存のものとする、「やってみなはれ」がシンギュラリティ時代の選択肢です。Uberは「やってみなはれ」で、まずはスケール（市場を占有）することを目指しました。法律は後から付いてくるという考えです。今までのPDCAサイクルは長過ぎです。計画ではなく仮説を実行するHDCAもまだまだです。DADADAサイクルこそがこれからの時代に合います。生き残るためには、テクノロジー、多面的思考、洞察力を融合させる必要があります。そして、AIに代替されない商品・サービスとする必要があります。

以上